

第13節 英語

第1 英語科の基本的事項

1 改訂のねらい

(1) 改善の基本方針

平成21年3月に告示された高等学校学習指導要領の改訂にあたり、平成20年1月に出された中央教育審議会の答申で、職業以外の専門教育に関する各教科・科目について、次のような改訂の基本的な考え方が示されている。

「職業以外の専門教育に関する各教科・科目については、専門教育を主とする学科（例えば、理数、体育、音楽、美術、英語に関する学科など）の特色が一層生かされるよう、また、社会の変化に対応し、生徒一人一人の興味・関心、能力・適性等を一層伸ばす観点から、例えば、新たな科目を設けたり、内容を選択して学習したり、重点的に学習したりすることを拡充して、主体的・問題解決的な学習を充実するなどの見直しを行うことが適当である。」

専門教育の英語科（以下、英語科とする）の改訂に当たっては、このほかに、外国語科の改善の基本方針を踏まえて行われた。このような高等学校学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえ、埼玉県教育委員会は、英語科に係る埼玉県高等学校教育課程編成要領を改訂するものである。

英語科の改訂の要点は、以下の4点である。

ア 目標は、英語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養うこととした。

イ 「総合英語」については、外国語科の「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」及び「コミュニケーション英語Ⅲ」の内容等を、「英語表現」については、外国語科の「英語表現Ⅰ」及び「英語表現Ⅱ」の内容等を、それぞれ適宜発展、拡充して指導することを明確化し、より系統的な指導ができるように工夫した。

ウ 文法事項については、外国語科の英語に関する各教科と同様、言語活動と効果的に関連付けて指導することを明確化した。

エ 外国語科の英語に関する各科目と同様、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とすることを明記した。

(2) 改善の具体的事項

ア 「総合英語」

「目標」において社会生活において活用できるようにすることを明記した。

「内容」においては、「課題研究」を加えた。また、「内容の取扱い」においては、外国語科の「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」及び「コミュニケーション英語Ⅲ」の内容を発展、拡充させて取り扱うことを明記し、英語科における総合的なコミュニケーション能力を育成する科目として、より系統的な指導が行えるよう工夫した。

イ 「英語理解」

「目標」において情報や考えなどを的確に理解し自らの考えを深める能力を一層伸ばすことを明記した。

ウ 「英語表現」

「目標」において事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を一層伸ばすことを明記した。それに伴い「内容」においては「プレゼンテーション」及び「小論文」を加えた。また、「内容の取扱い」においては、外国語科の「英語表現Ⅰ」及び「英語表現Ⅱ」の内容を発展、拡充させて取り扱うことを明記し、英語科における表現力を育成する科目として、より系統的な指導が行えるよう工夫した。

エ 「異文化理解」

「内容」において「伝統文化」を加えるとともに、「内容の取扱い」においては、必要に応じて我が国の事情や文化などを取り上げ、外国の事情や文化との類似点や相違点について考えさせることとし、異文化理解を通して自国に関する理解を深めることとした。

オ 「時事英語」

「目標」において「必要な情報を選び」が付け加えられた。「内容」においては、「時事的な内容に基づく発表や討論」を加え、単に情報を理解するのみならず、自らの考えや意見などを発信する発表や討論などの活動を行うこととした。

2 英語科の目標及び科目の編成

(1) 英語科の目標

教育課程編成に当たっては、英語科の目指すところとして、以下の高等学校学習指導要領の目標を十分に踏まえ、各学校の目標を定めるものとする。

英語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。

上記の目標は、外国語科のそれと同じである。外国語科の目標と同様、「的確に理解する」や「適切に伝える」等の言葉を付け加え、場面や状況、背景、相手を意識した言語使用を重視する。

(2) 科目の編成

英語科に属する科目は、現行の「生活英語」及び「コンピュータ・LL演習」を廃止し、現行の7科目から5科目による構成に変更された。その標準単位数については、埼玉県教育委員会において、次の表の通り定める。

科目	標準単位数
総合英語	2～12
英語理解	2～6
英語表現	2～7
異文化理解	2～6
時事英語	2～6

3 指導計画の作成

英語科の各科目には、その性格、目標及び内容により、他の科目の基礎となる学習を中心とするもの、発展的な学習をするもの、他の科目との補完性の強いものなどがある。したがって、指導計画の作成に当たっては、各科目間の関連について留意し、指導の時期、順序等について十分検討し、各科目を有機的に関連付けて指導することにより、英語科の目標を達成することが大切である。

- (1) 「総合英語」及び「異文化理解」については、すべての生徒に必ず履修させる。
- (2) 現行の「英語理解」、「英語表現」及び「時事英語」については原則として「総合英語」を履修した後に履修させるという条件を削除し、生徒の実態や履修単位数などに応じて、より弾力的で多様な指導計画を検討することが可能になった。

第2 各科目の概要

1 「総合英語」

(1) 目標

英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を一層伸ばし、社会生活において活用できるようにする。

この科目は、英語科において、すべての生徒に必ず

履修させる。文字通り4技能の育成により、総合的なコミュニケーション能力の向上をねらっている。外国語科の「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」及び「コミュニケーション英語Ⅲ」の発展、拡充という位置付けである。「社会生活で活用できる」とは仕事に就いた際や高等教育機関などで、情報や考えを理解したり伝えたりできるということである。

(2) 内容

ア 発音

アクセントやイントネーション、リズムはもちろん、強く発音する語と弱く発音する語、音の連結、同化なども意識させる。日本語における発音との対比などを意識させながら指導することも有効である。単語のみの発音練習に終始せず、常に実際のコミュニケーションの場面を想定することが必要である。

イ 聴解

「聴解」とは単なる英語の「聞き取り」ではないことに注意する必要がある。ディクテーションや英文の穴埋めにとどまらず、内容の理解ができるようになる方法での指導が必要である。

ウ 対話

互いに情報や意見を交換したり、気持ちや考えを伝え合ったりするスキルを目標とする。質問や依頼に適切に応じたり、聞き返しなどによる内容の確認、読んだり聞いたりしたことなどについて意見を述べ合うことなどが対話に関する項目として挙げられる。

エ スピーチ

中学校で学習指導する簡単なスピーチを発展させ、論理的にプレゼンテーションを行う方法について指導する。生徒は話し手であると同時に聞き手の役も担うことになる。その際に、聞き手には話し手に対して質問したり、評価したりするなど積極的な参加者としての役割を与えることによって指導の効果を高める。

オ 読解

読んで意味をとらえることはもちろん、内容を理解し、その情報を活用することについても配慮が必要である。

カ 作文

コミュニケーションは常に相手がいるものであるから、読み手を意識して書くことや、表現する際理由付けやその説明など、論理的な文章を書くための過程についても指導することになる。教師は文構造や表現の誤りを訂正するだけでなく、コミュニケーションの手段として目的を達成しているかという視点を常にもつようにする必要がある。

キ 課題研究

今回の改訂で新たに設けたものである。生徒が自ら課題を設定して、考察、意見を含む成果物を完成させる活動である。情報の収集・分析の手法を指導したり、生徒の意見も含めさせたりすることが求められる。英語科だけでなく、他教科の教師の協力も得て、教科横断的に指導に当たるように努めるものとする。また、成果の発表の機会を設けることも大切である。

2 「英語理解」

(1) 目標

英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解し自らの考えを深める能力を一層伸ばす。

この科目では、聞いたり読んだりする活動が中心となるが、話すことや書くこととも関連させて総合的に指導することになる。

聞いたり読んだりしたことを理解したうえで、考えを深めるという活動を工夫する必要がある。また教材の分量や程度、聴解や読解を行ううえでの速度に配慮するものとする。

(2) 内容

ア 発音

「総合英語」に準じる。

イ 聴解

「総合英語」に準じる。

ウ 精読

文章の詳細にわたって理解を深めていくことである。文構造の分析や英文和訳ではなく、読んだ情報と自分の考えを対比させたり、表現の方法について味わいながら読んだりすることを指している。そのためには教師が適切に目標を設定することが必要である。

エ 速読

概要・要点の理解を目的として読み進めてゆく方法である。電子メール・新聞・雑誌・ウェブサイトなどから、すばやく要旨をつかめるように指導することが望まれる。ウの「精読」との目的や手法の違いについて説明することが必要である。また次項の「多読」とも密接な関係を持たせて指導することが効率的である。

オ 多読

習熟の程度によって、段階的に分けられた本や物語を多量に読むことである。英語を読むことの楽しさが味わえるような活動とすることが必要である。この活動によって、「速読」をする力が付くことはもちろん、単語や文構造についても理解が進むことが

期待できる。生徒が自ら題材を選択する機会を与えるように努める。家庭での学習としたり、授業で一定時間を割いて取り組ませたりするなど様々な手法があるが、いずれの場合でも教師による適切な観察と指導が欠かせない。

カ 鑑賞

この活動は、上記の「精読」、「速読」及び「多読」と密接な関係を持たせて指導すべきものである。物語・伝記・小説・随筆・論文・詩・映画などメディアにこだわらず、様々な作品に触れて、そのよさを味わう活動である。生徒の習熟度にあわせ、学習意欲が向上するような題材を選ぶことが大切である。

読んだり見たりするだけに終始せず、鑑賞後の活動についても配慮が必要である。

3 「英語表現」

(1) 目標

英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を一層伸ばす。

この科目では、主に話したり書いたりする活動が中心となる。この科目もコミュニケーションの相手にどう伝えるかを念頭において指導することが必要である。さらに、論理的に考え、効果的に発表できる力の育成が重要となる。

「話す・書く」という活動を基本にしながらも、聞くことや読むことも取り入れ、以下の内容を有機的に関連させて指導の効果を高めるようにする。

(2) 内容

ア 発音

「総合英語」に準じる。

イ 対話

「総合英語」に準じる。

ウ スピーチ

「総合英語」に準じる。

エ プレゼンテーション

グラフや図表などの資料を用いて、効果的に情報を提示して説明する活動である。特にプロジェクトを使って、コンピュータで作成したスライドにあわせて話す活動が効果的である。個人やグループでの発表が考えられるが、聞き手にわかりやすく伝える手法の学習をさせることが必要である。その際には、十分な時間を与えて準備させることと、発表の前における練習も大切となる。

オ ディベート

与えられた論題について、肯定・否定の立場に分かれて議論する活動である。生徒の実態にあわせて、

ルールや論題、審判について段階的に指導する。実際にディベートを行う前に、聴衆を納得させる論理的な話し方や反論の方法について学習が必要である。肯定側・否定側・審判の役割は交代させることも念頭に置き、自分の意見に左右されずに論理性を中心に判定する方法に関して周知しておくことも大切である。

カ ディスカッション

互いに意見を出し合って問題の解決方法を探り、課題に対する理解を深め、問題を整理する力を育成する活動である。司会など一定の役割を設定することも有効である。単に話し合うだけでなく、説得したり譲歩したりすることによって、結論に達するよう指導を工夫する。

キ 手紙・日記

手紙を書く指導においては、相手や場面により適切な文体や形式を選ばせる。また、電子メールが多く使われるようになってきている現在、その書き方や様式に慣れることも重要になってきている。実際に電子メールを使って交流をするなど、意欲を高める活動も有効である。

日記は本来読み手を想定したものではないが、教師やALTがフィードバックをしたり、生徒同士で交換したりするなどの活動をすることもできる。

ク 作文

「総合英語」に準じる。

ケ 小論文

今回の改訂で新たに設けられたものである。あるテーマについてまとめた文章を書く活動である。課題の設定から、情報の収集・分析にいたるまで十分な時間をかけて準備させる必要がある。文章の構成の仕方、論文に特有な表現、語彙などにも注意させることが望ましい。学んだ内容の集大成として卒業論文に取り組むという方法もある。

教科の枠を超えて、他教科の教員の協力が得られるように働きかけ、指導の幅を広げるよう工夫する。

4 「異文化理解」

(1) 目標

英語を通じて、外国の事情や異文化についての理解を深めるとともに、異なる文化をもつ人々と積極的にコミュニケーションを図るための態度や能力の基礎を養う。

この科目は、英語科において、すべての生徒に必ず履修させることになっている。外国についての知識だけでなく、そこに暮らす人々の価値観や考え方を学んで、コミュニケーションに役立たせようというものである。ALTや外国からの訪問者との交流や電子メー

ルによる交流を活用することによって、実際のコミュニケーションを通して学習できるように工夫することが求められる。また、自国の文化との対比により、さらに理解が深まるということを念頭におく必要がある。

(2) 内容

ア 日常生活

外国における衣食住、家庭生活、学校生活に関する内容を扱う。

イ 社会生活

上記のア以外において、外国で日々起こっている事象を扱う。

ウ 風俗習慣

外国の習慣や年中行事、民話や童話、伝説、ことわざ、童謡などを扱う。

エ 地理・歴史

異文化理解の背景となる地勢や気候、産業、その国の歴史について扱う。

オ 伝統文化

今回の改訂で新たに設けた内容である。長い歴史の中で培われてきた文化や行事について扱う。ウの「風俗習慣」とも関連性を持たせることが可能である。また、外国からの訪問者がある場合には、我が国の文化との相違や類似などを調べて討論するなどの活動も有効である。

カ 科学技術

外国における科学や技術の成果や発展状況などに関する内容を扱う。例えば、環境保全の技術や手法など、異文化における科学技術の相違や類似点を英語を通して学習する。イの「社会生活」やエの「地理・歴史」と関連させることも可能である。

キ その他の異文化理解に関すること

上記ア～カ以外のものを扱う。ジェスチャーや話題の取り上げ方、また、コミュニケーションの仕方の違いなど、各学校において生徒の興味・関心に応じて工夫する。

5 「時事英語」

(1) 目標

新聞、テレビ、情報通信ネットワークなどにおいて用いられる英語を理解するとともに、必要な情報を選び活用する基礎的な能力を養う。

この科目では、メディアで使われている英語を理解することに加えて、自分の意見を述べたり討論したりする、能動的で発信型の活動を展開する工夫が必要である。生徒の関心や習熟度に配慮して、身近な話題から国際問題にいたるまで、様々な題材や話題を取り上げて指導する。

内容は多岐にわたるので、他科目、他教科との連携

にも努めるものとする。

(2) 内容

ア 新聞や雑誌などの理解

主に紙のメディアから、メッセージをすばやく把握したり要約したりする活動を通して、特有の表現や語彙、文章の構成について学習する。見出しや段落の構成などにも注意を払わせることが大切である。記事を読んで理解するだけでなく、そこで学んだ語や表現、文章の構成法を使えるように指導する。

イ テレビ番組や映画などの理解

アの内容と重なる面もあるが、天気予報・ドラマ・コマーシャルなど、映像を中心としたメディアの英語を扱う。特有の表現や口語的な表現など、ネイティブ・スピーカーによって実際に使われている表現を学ぶ機会とする。

ウ 情報通信ネットワークを通じて得られる情報の理解

情報通信ネットワークの発達によって、文字と映像メディアが統合されつつある。ウェブサイトの情報を読み取ったり、外国で放送されているラジオ、テレビ番組を視聴したりするなど、様々な形態が考えられる。電子メールやテレビ会議による交流も推奨されるが、毎回目標やテーマを明確に設定する必要がある。

エ 時事的な内容に基づく発表や討論

アからウを通じて理解した情報や表現をもとに、情報を発信するスキルを養成するものである。生徒自ら記事を書かせたり、番組を制作させたりするなど、活動において工夫する。発表や討論に関しては、「英語表現」の指導内容に準じる。

第3 指導計画の作成

1 基本的な考え方

高等学校学習指導要領第1章総則第1款の1に「各学校においては、教育基本法及び学校教育法その他の法令並びにこの章以下に示すところに従い、生徒の人間として調和のとれた育成を目指し、地域や学校の実態、課程や学科の特色、生徒の心身の発達の段階及び特性等を十分考慮して、適切な教育課程を編成するものとし、これらに掲げる目標を達成するよう教育を行うものとする。」と示されていることに留意して、以下の事項に配慮して教育課程を編成するものとする。

2 指導計画作成上の配慮事項

高等学校学習指導要領第1章総則第5款の3には「各学校においては、次の事項に配慮しながら、学校の創意工夫を生かし、全体として、調和のとれた具体的な指導計画を作成するものとする。」とある。具体的には、「(1)各教科・科目等について相互の関連を図り、発展的、系統的な指導ができるようにすること。(2)各教科・

科目の指導内容については、各事項のまとめ方及び重点の置き方に適切な工夫を加えて、効果的な指導ができるようにすること。」と述べられていることを各高等学校においては十分に配慮するものとする。

なお、英語科の各科目には、他の科目の基礎となる学習を中心とするもの、発展的な学習を中心とするもの、他の科目との補完性の強いものなどがあるので、指導計画の作成に当たっては、各科目の関連について留意し、指導の時期や順序などもよく検討して有機的に関連付け、英語科の目標が達成できるようにする。

ただし、高等学校学習指導要領第13節英語第3款の1には、「英語に関する学科の指導計画の作成に当たって、「総合英語」及び「異文化理解」については、原則として、すべての生徒に履修させるものとする。」とあるので、注意が必要である。

各科目の指導計画を作成するに当たっては以下の点にも配慮する。

(1) 「総合英語」

コミュニケーション能力を総合的に育成する科目であり、外国語の「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」及び「コミュニケーション英語Ⅲ」の内容等を参照したうえで、その内容を発展、拡充させる。4技能を別々に扱うのではなく、聞いたことや読んだことを踏まえたうえで話したり書いたりするといった4技能を結び付けた言語活動を通して、将来仕事や研究などの社会生活において活用できるコミュニケーション能力を育成する。

また、生徒が自ら課題を設定し、その解決のために情報を収集・分析したうえで、自分の考察や意見などを発表し、他の生徒と成果を共有できるように授業をデザインする。その際、他教科の教員と連携して、生徒の興味・関心に応じて題材を提供するとともに、生徒の自発的な学習の機会をできるだけ多く設けるように学習環境を整えるものとする。

(2) 「英語理解」

聞いたり読んだりした内容をもとにして、感想や意見を口頭で発表したり文章で表現したりするなど、話すこと及び書くことも有機的に結び付けて、聞く及び読む能力を伸ばすように指導する。受け取った情報や考えを的確に理解したうえで、自分の考えや感じ方と照らし合わせたり比較したりするなどの作業を通して、自らの考えを深めるように計画する。なお、生徒の習熟の程度に応じて、教材の分量や程度及び聴解や読解の速度などを調節する。

(3) 「英語表現」

外国語科の「英語表現Ⅰ」、「英語表現Ⅱ」を参照し、その内容を発展、拡充させる。事前に聞いたり読んだりしたことをもとにして、話したり書いたりする活動

を行うことで、聞くこと及び読むことと有機的に関連付ける。知り得た事実や意見を多様な観点から考察したうえで、その結果をより適切かつ効果的に表現することを目標にする。論理の展開や表現形式をわかりやすくするように工夫したり、話す速度や非言語的な表現方法などについても心を配ったりしながら、意見や情報を伝達できるように指導する。

(4) 「異文化理解」

異文化理解の学習内容については、生徒の実態などに応じて適宜選択して行うが、その国の人々の価値観やものの見方、考え方の背景を成す伝統的な行事や文化に関する内容も取り上げるよう努めるものとする。外国の人々と電子メールを交換したり直接会って話したりするなどの活動を通して、外国の事情や異文化について生の情報を得る機会とするとともに、より積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や能力を育成する。異文化を理解する際は、自分の文化と比較、相対化させることによって、相手と自分の双方の文化をより深く理解できるように配慮する。地理歴史科や公民科など他の教科等との関連も工夫する。

(5) 「時事英語」

様々なメディアによって伝えられる文字・音声・映像などによる情報が教材となるが、英語圏にとどまらず、全世界もしくは地球規模の話題など幅広い題材があることに留意する。得られた情報を理解したうえで、必要な情報を選択し、それらを活用して話したり書いたり、さらにはその内容をもとに発表したり討論したりする活動を取り入れるものとする。生徒の実態や興味・関心に応じて分量・程度・速度・内容等に配慮する。内容面では日常生活から政治経済、科学技術等も扱われることから、他の教科等との関連にも配慮する。

第4 指導上の留意点

1 基本的な考え方

高等学校学習指導要領第8節外国語第2款の各科目の「内容」及び「内容の取扱い」並びに第3款「英語に関する各科目に共通する内容等」に示された具体的事項を参考としながら、専門教科としてふさわしい特色をもたせるよう配慮するとともに、各学校では生徒の実態に応じて弾力的な取扱いをする。

2 教材の取扱い

教材については、英語を通じてコミュニケーション能力を総合的に育成するため、各科目の目標に応じ、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮したものを取り上げるものとする。その際、英語を日常使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化や自然科学などに関するものの中から、生徒の発達の段階及び興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げるものとし、次の観点に留意する必要があること。

- ア 多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。
- イ 外国や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。
- ウ 広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと。
- エ 人間、社会、自然などについての考えを深めるのに役立つこと。

教材については、学習に対する関心や意欲を高め、4技能を総合的に育成し、実際に英語を用いてコミュニケーションを行うことが可能になるように、具体的な使用場を設定して、多様な言語活動が経験できるよう、選定及び活用の方法に留意するものとする。そのうえで、生徒が英語で発信する内容が充実したものとなるように、受信者として想定される外国の人々の文化・歴史などに加えて、発信者自らの文化的な背景や伝統などについても理解を深め、英語で表現する力が育成できるよう留意する。

また、国際社会に生きるうえで必要とされる、文化や生活、言語の相違を理解し尊重する態度や広い視野を育成することに資する教材や、環境問題の解決が急がれる現代にあつて、自分たちを取り巻く社会や自然について考察し、自然科学等に興味・関心をもたせる教材を使用するものとする。

3 指導方法等の留意点

生徒が情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践するように具体的な言語の使用場を設定して、多様な言語活動を体験させながら指導すること。

コミュニケーション能力を育成するために、情報や考えなどを実際に理解したり伝えたりする具体的な言語の使用場を設定して、多様な言語活動を発信者・受信者の双方の立場で実践・体験させることが必要で

ある。

生徒の実態に応じて、多様な場面における言語活動を体験させながら、中学校や高等学校における学習内容を繰り返して指導し定着を図ること。

学習内容の定着には、できるだけ多くの言語活動を体験させることが大切である。様々な言語活動によって、同じ語彙・文法事項・文構造などに繰り返し接することになり、生徒自身が自然に言語を内在化させ、自らの力とすることができる。中学校における英語や高等学校における英語科の他の科目の学習内容に繰り返し触れることができるように、それぞれの科目の目標に応じた言語の使用場面を設定し、具体的な活動を通して一層の定着を図る。

英語に関する学科の各科目については、その特質にかんがみ、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とすること。その際、生徒の理解の程度に応じた英語を用いるよう十分配慮すること。

英語で言語活動を行うことを授業の中心とし、その中で生徒もできるだけ多く英語を使用するようにする。日本語を介さずに、英語を英語のまま理解し表現するように留意し、授業が実際のコミュニケーションの場となるようにその活性化を図る。

英語で書かれた文章を多く読み、訳読せずに要点をとらえる活動、要約やそのテーマに沿った文を英語で書く活動等をできるだけ多く取り入れる。全体としては、読む・書く・聞く・話すの4技能にわたる活動をバランスよく取り入れることが必要になる。

教師は、従来クラスルーム・イングリッシュと呼ばれてきた授業中の指示や励ましにとどまらず、説明なども基本的に英語で行う。その際、生徒の実態に応じて、簡単な語句・英文を用いたり、ゆっくり話したりするなどの工夫を施す必要がある。なお、英語による言語活動が授業の中心となっていれば、文法の説明など必要に応じて日本語を交えることは可能である。

生徒の発話に対し、意味が伝わらないおそれがあるために正しく言い換えるといった指導を行う際には、コミュニケーションを積極的に行おうという態度を損なわないように配慮する。一方、文字で行うコミュニケーションでは、正確さや適切さが一層重要となるので、生徒が書いた英文に誤りや曖昧さがあつた場合は、文法や語彙を運用する能力を高めながら、より正確で適切な英文が書けるように指導していく。

各科目の指導に当たっては、指導方法や指導体制を工夫し、ペア・ワーク、グループ・ワークなどを適宜取り入れたり、視聴覚教材やコンピュータ、情報通信ネットワークなどを適宜指導に生かしたりすること。また、ネイティブ・スピーカーなどの協力を得て行うチーム・ティーチングなどの授業を積極的に取り入れ、生徒のコミュニケーション能力を育成するとともに、国際理解を深めるようにすること。

情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養うという目標の達成に向けては、英語に関する知識を増やすだけでなく、英語を実際の場面で使用する機会をもつように留意しなければならない。一人一人の生徒が実際に言語を使うようにペア・ワーク、グループ・ワークを取り入れたり、視聴覚教材を利用して臨場感のある中で活動を行ったりするといった工夫も望まれる。コンピュータを利用した個別学習や、インターネットや電子メール、テレビ会議などを利用した実際の交流活動なども取り入れることも効果がある。

また、ALTや地域に住む外国人、外国からの訪問者、留学生、外国生活の経験者などの協力を得て行うチーム・ティーチングなどの授業においては、生徒のコミュニケーション能力を向上させる活動を展開する一方で、英語を通して世界の様々な国の人々との交流の機会を多く設定することで、言語・文化・歴史などが異なる人々と相互に理解する姿勢を育て、国際理解を深めるようにすることも大切である。